

MOMO 企画の「ファンタジーと現実の関係を考える」として以下の文章を掲載します。ご意見を頂ければ幸いです。6つ目の考察です。

MOMO 企画の「ファンタジーと現実の関係を考える」 6

現実とファンタジー と 自閉やデジタルな世界

発達クリニックぱすてる 東條恵

2021年3月11日

はじめに

自閉症と非自閉症における現実とファンタジーを、私は気にしています。「現実とファンタジー」という題名での書籍も出ており、読んでみると難解でありましたが、私の問題意識と重なっていることを理解しました。それはそれとして、私の気にしてきたことについて、私なりの現在の言葉使いで、述べてみようと思います。

この小論での言葉の使い方について

議論のために、ここでの「現実」そして「ファンタジー」とは何かを、とりあえず決める必要があると思います。

現実とは？ 自動的に行う、情報処理の出力としての反射的に近い世界、現実に適応しようとしている世界とします。目に向かって小さな昆虫がとんできたという視覚情報によって、瞬時に顔を背けるとか、瞼を閉じる行動をすることがありますが、これは「現実対応の行動」とします。または、課題に直面し、それに対応しなくてはいけない状態、例えば学校で与えられた勉強をしている姿を現実とします。このような数々の行動で形つくられている世界を、ここでの「現実」とします。

ファンタジーとは？ この例では、目の前に飛んできているものは何だろうとか考え、それが自分にとって危険かどうかについてゆっくりと考え、どうすべきかの選択肢を考えることが、ここでのファンタジーとします。または、この勉強は将来なんの役に立つのだろうと思ったりすることを、ファンタジーとします。人として、「本能的レベルに基づく動物的動きではなく、大脳を十分に使って考えること、想像力を使って選択肢を考えること」を、「ファンタジー」とします。「想像力/創造力」と言い換えても良いのだろうと思います。

さて私たちの日常生活においては、なんとなく大まかに、「現実」と「ファンタジー」を分けている人

が多いと思います。日常の生活、学校へ行って、仕事場に行ってやるべきことをして、休み時間や帰宅後には、好きな音楽を聴いたり歌を歌ったり、恋人や家族の事、小説の中の事を空想したりしていることでしょう。ここでは、「現実」と「ファンタジー」は分かれています。

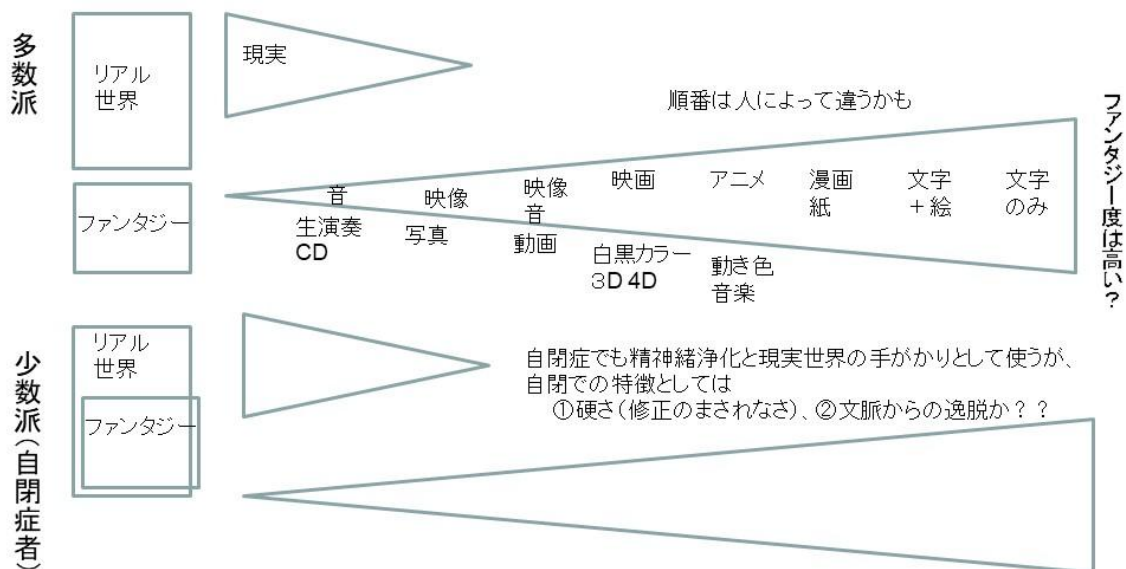
ファンタジー世界への入り方は、人により違うでしょう。図に書きましたように、ファンタジーへ入るきっかけは、音→映像→音と映像→映画→アニメ→漫画→文字+絵→文字のみといった順に（私の考える順番です）、ファンタジー度は高くなり、想像力を必要とする世界を作れるように推測しています。

何故人は、ファンタジー世界が好きなのか、必要としているのかに関しては、「精神の浄化」と「現実理解の手がかり」という観点をこの間知りましたが、なるほど納得できる点は十分にあります。それ以外にも、適切な言葉・観点があるのかもしれませんが、今の私には見つけることができていません。教えていただければ幸いです。

一方、自閉症の幼児期では、ファンタジーの世界が現実と重なっていた、現実とファンタジーを上手く区別できなかつたと表現している人が複数おられます。何故でしょうか。今の私には、まだ上手く説明できません。今後考えてみたいと思いますが、論点などご教示いただければありがたいです。

ファンタジーへのきっかけと広がり

何故人は作り出す？ より一層の現実理解への手がかりとして、精神浄化としてか？
何故人はファンタジーにはまる？

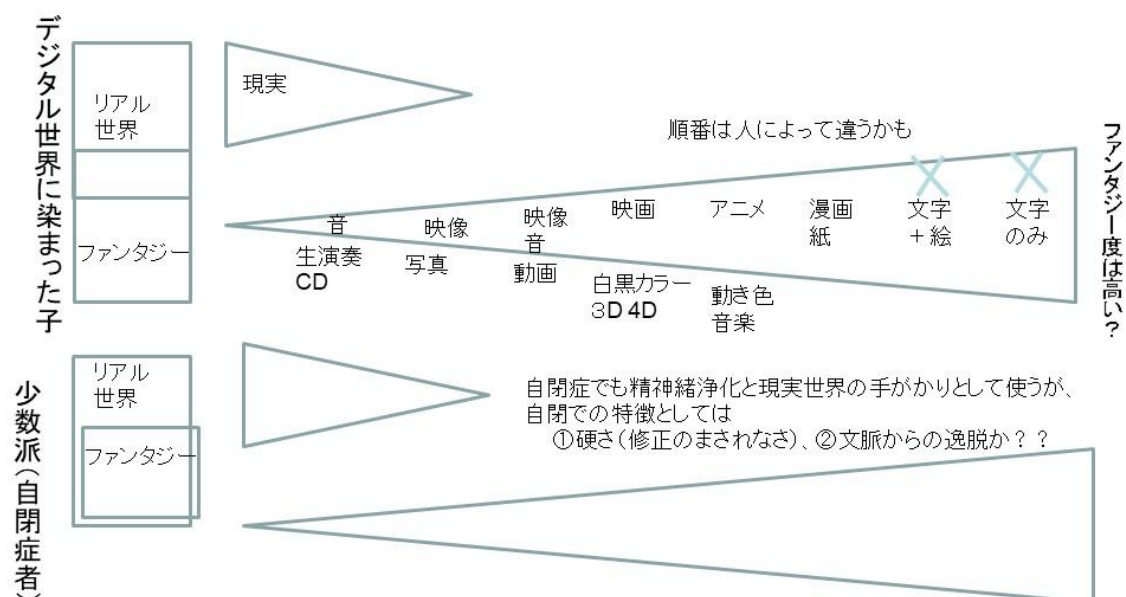


デジタルな世界にはまった方々、ネット・ゲーム中毒的なお子さんでは、この問題がどうなのか、気になるところです(下図)。想像としては、より少数派である自閉スペクトラム症者の状況・感覚に近く

なっている可能性があるのかなと理屈っぽく考えてみるのですが、本当のところはわかりません。また、映像の方が、想像力を使う必要がないわけで、デジタルの世界にはまったお子さんには、それがストレートなのかもしれません。映像のない文字だけの読書では、想像・ファンタジーの世界に入りにくくなっているのかも思ったりもします。どんなものでしょうか。

ファンタジーへのきっかけと広がり

何故人は作り出す？ より一層の現実理解への手がかりとして、精神浄化としてか？
何故人はファンタジーにはまる？



先日成人の自閉スペクトラム症の方と、最近私のはまった「十二国記」というファンタジー小説の話を外来でしました。両者が読んだ本であり、その話題は楽しく、もっと話の中身を議論しつつ、「精神の浄化」、「現実理解の手がかり」にどう互いが役立ったかの話を詰めてみたいものです。その方は、「本の中から、人の生き方を学んでいるのです」と述べる方でした。勿論私も、十二国記からは、人の感じ方や生き方を学んでいるのです。

高機能自閉の方の幼児期では、感覚的なファンタジーの世界が強い方がおられ(森口奈緒美さんの変光星の世界など)、成人期ではその感覚的なファンタジーは、おそらく発達期のものとして過去のものとして後景となり、ファンタジー世界である小説は現実理解の為の学習対象となっている人が居ると理解しました(成人自閉症者の自伝で青年期はそのような記述が多いと思います)。

このようなことを考えています。

以前掲載した図を、再度掲載します。この二つは、何を意味しているかですが、自閉症では、ファ

ファンタジーの世界は現実世界に隣り合わせて存在し、その世界とは行き来がスムーズで自由なのは、との推測です。一方、多数派では、ファンタジーと現実とは隣り合っておらず、まったく別個で、ファンタジーの世界に行くには、きっかけとなる文字による文章といった情報があり、その後には大いなる飛躍が起こってファンタジーの世界へどっぷりというイメージです。「それはあなたの状態を述べているにすぎない」と批判されるかもですね。大いなる間違い・勘違いかもしれませんね。

